

丁玲《新的信念》試論

——「語り」はいかにして生まれたか——

金 ス ノ オ グ

- | | |
|----------------|------------------|
| 1. はじめに——小稿の目的 | 3. 「語り」の完成 |
| 2. 「語り」の発生 | 3-1. 二つの「語り」の結合 |
| 2-1. 混乱する「語り」 | 3-2. 〈何を語るべきか?〉 |
| 2-2. 聞き手の発生 | 4. おわりに——こわれゆくもの |
| 2-3. 葛藤と沈黙 | |

1. はじめに——小稿の目的

延安で書かれた丁玲の短編小説《新的信念》(1939年初出、原題《涙眼模糊中之信念》)は、同時期の彼女の作品の中でもよく知られている。特に、日本軍に強いられた(恥辱)の経験を公然と語って人々を抗日戦に立ち上がらせる老女の行動は注目され、封建的な価値観に打ち克ち抗日に立ちあがる女性を描いたとして評価されて来た。だが、こうした評価はストーリーの結末のみを重視し、結果的に老女の行動を全体の文脈から切り離してしまった観がある。作品を読めばすぐに気付くことだが、人々を(抗戦)に駆り立てる、という彼女の「語り」の動機は初めから確立しているわけではない。そもそも老女自身の(恥辱)は、彼女が語る「逃げ遅れた者が受けた残虐行為」の一部に過ぎない。

むしろ本作品において注目すべきは、老女の「語り」が変容する過程であり、そこに日本軍の襲撃時「無事であった」聞き手が大きく関わることだ。「語り」は聞き手との関係によって変容し、また聞き手の反応もそれにつれ変化する。つまり、ストーリーの展開において両者は相互に依存的である。だが、それは老女が相手に應じて虚言を弄するということではない。断っておくが、テキスト自体の語り手は「日本軍の暴行」を直接に描寫しない。そのため読者は、老女が語る「日本軍の暴行=その時、西柳村に起きたこと」が、作品における事実経過に即するか否かを問題にし得ない。その限りで、本作品は唯一の生存者と無事であった者との間に生成・変容する「語り」の物語として読むこ

とができる。

小稿は、この語り手／聞き手の間に生成・變容する「語り」に着目し、讀解を試みる。先に述べたように、結末において老女は人々を抗戦へ驅り立てる「語り」を獲得するが、それは彼女に何をもちたらすのか、そこへ至る過程を通して考える。

底本は民國 38 年 (1949 年) 3 月初版の上海春明書店印行《現代作家文叢 丁玲文集》。これは、初出と目される《文藝戰線》第一卷第四期 (1939 年 10 月) の影印 = 書目文獻出版社《抗戰文學期刊選輯 第二輯 文藝戰線》と比べ、印刷上のミスを除けばほぼ異同がない⁹⁾。また、1951 年 1 月修訂第二版の生活・讀書・新知三聯書店《我在霞村的時候》、1982 年湖南人民出版社版《丁玲文集》第三卷を参照したが、前二者のテキストに比べ餘りに異同が多く、特に後者にはストーリーの根幹に關わるような書きかえが見られる¹⁰⁾。こうした書きかえは丁玲研究においてそれ自體重要な問題だが、差し當り小稿の主旨とは關わらないし、全てを一々指摘する紙幅もないためここでは言及しない。

本文引用 〈 〉 は拙譯により、該當の頁數を [] 内に記す。リプリント版の異同その他については文末に注記する。なお「」は議論の便宜上筆者がつけたものである。

2. 「語り」の發生

2-1. 混亂する「語り」

物語は山西の一村落を舞臺に、老女の長男陳新漢の歸村から始まる。季節は冬。五日前、この西柳村は日本軍に襲撃された。彼は無事逃げたが、家族とはぐれた。とりわけ一人息子同官と次女銀姑、老母の安否が気がかりだ。五日後、(遊撃隊が村を取り戻した) との知らせが入り歸ってきた。一家の大半は無事戻っていたが、懸念された事態が起っていた。息子が遺體で發見され、既に葬られていた。しかも老母と次女が行方不明であった。一家は二人の生存に一縷の望みを繋ぐ。あくる朝、半死の状態の家の前に辿り着いた老母が發見される。日本軍に囚われながら、奇跡的に生き延びたのだ。彼女は言葉も意識も失っていたが、家族が見守るなか息を吹き返し、數日のうちに回復する。

最初の「語り」のシーンは陽のあたる庭である。老女は家内の女達にいないになった孫娘銀姑の末路を話し始める。『あの子は叫んだ、わめいた。兩足は太鼓を叩いてるみたいに、眞っ白い腹がひっきりなしに動いて……』。あまりに明らさまな祖母の言葉に、上の孫娘金姑は恐怖を露にし拒絶する。『ばあちゃん、やめて。怖いよ』。金姑は顔を手で覆った〔115-116頁〕。だが老女は語ることをやめない。家人の反應にむしろ〈満足（原文、滿意）〉を覚え、一層殘酷な「語り」を續けるのである。

『三人の鬼子が同時に乗かった』。彼女は大喜びで（同、很高興）孫娘を脅し付けるように言った。『あの子は叫んだけど聲が出なかった。顔が紫色に変わった。ウン…ウン…母牛みたいに唸ってた。子供を生むんだってあんなに辛くないよ。あの子は目をこっちにむけた、あたしやすぐにあの子に言い付けた、「舌を噛み切んな、力一杯噛むんだよ」って。あの子が死んだ方がマシだって思ったんだ』。／『ばあちゃん！ばあちゃんてば！』嫁達の顔も青くなった。／が、彼女は満足げに續けた。『あの子はほんとに死んじゃった。舌を噛んで死んだんじゃない。あの子の白く太った下半身が血溜りに寝てた、あの血は子供一人生むのに比べてもちっとも少ない。胸の上にも血があって、腰まで流れてた。やつらはあの子のちっちゃな乳首を噛み切っちゃった、あれはおまえのより大きくはなかるうに！』彼女は巫女のように、二つの異様な眼（同、魔眼）で孫娘の顔を見据えた。『小さなほったも噛み潰されちゃった、まるで蟲に食われたリンゴみたいにね。あの子はそれでもふたつの目ん玉であたしを見てたよ』〔116頁〕。

金姑や嫁達が示す恐怖や嫌悪は眞っ當な拒絶反應だが、語り手の老女は對照的に喜々としている。この異様なやりとりにテキストの語り手はこう付け加える。〈ばあさまは變わってしまった、彼女は家族を愛さなくなったのだろうか？どうして彼女はいつまでも彼女達（＝嫁達、以下同）をおどかすのだろうか。彼女達が嘆息し泣き出すと、彼女はすぐさま腹を立てて叫んだ。『おまえら泣きな、おまえらなんかこれぼっちの値打ちもない役立たずだ。待ってろよ、日本鬼子がまたやって来るからな！……』。彼女達が顔を赤くして、怒りに燃

えるのを見ると、彼女は自分が煽った炎に満足するのだった) [同上]。

老女は惨劇を事細かに再現し、拒絶されるとおまえたちも同じ目に遭うのだと恫喝する。相手が無事であったことをまるで呪うように、嫁達に自分の體驗と同じ恐怖や嫌悪を味わわせようとする。これは一見異常な行爲だが、老女と嫁達の上に横たわる差異——日本軍に囚われた者と無事だった者——に照らして考えれば、老女がそれを埋めようとするのはむしろ自然な心の動きにも見える。つまり混乱した「語り」にはひとつの代償行爲が讀み取れる。その意味で、最初の「語り」が日のあたる庭での寛いだひとときであり、相手が最も近く遠慮のない孫娘や嫁達であるのは重要だろう。

一方、息子達は別である。老女は嫁達の〈苦痛〉に構わず、一家の跡取り同官の死にざまも詳細に語るが、〈息子を見るとやめてしま〉う。彼等の〈探るような目付き(原文、探索的眼光)〉を恐れ、〈恥づかしさを覚え(同、覺得羞恥)〉るのだ [同上]。彼女にとって息子達が封建的な意味で遠慮を含む関係にあるためかもしれない。しかし、それも後に見るように新たな聞き手の獲得によって變質する。

2-2. 聞き手の發生

老女の話に無理に付き合わされる嫁達は、自發性の點でまだ聞き手とは呼べないかもしれない。ならば最初の自發的な聞き手は、身内の消息を訊ねに来る〈近隣(原文、隣舍)〉の者達だ。ここで老女の「語り」に變化が起こる。

〈この決してお喋りを好まぬばあさまは、自分の話が引き起こす効果のうちに(同、在她所起的効果中)僅かな慰めを感じた。この中で、彼女は同情と同感(同、同情與同感)を得、自分の憎惡(同、她的仇恨)が他人の身にも生じ大きくなるのを感じると、そのために恐怖(同、畏意)を忘れた。初めはやはり幾らかくどくど話し、續けてすぐに涙を流す。彼女は人々の顔色をうかがった。彼女はどんな文句がより人の心を動かすことができるか理解した) [117頁]。〉

聞き手の反應に〈慰め〉〈恐怖からの解放〉という精神的な充足を得た老女は、同時に〈より人の心を動かす〉ために「語り」を加工することを自覺し始

める。つまり、聞き手の反応を前提する語り方を會得する。そうして彼女は、〈自分の恥辱〉をも人々に明かす。聞き手の氣持を動かすような仕ぐさや、ちょっとしたエピソードを交えながら。——〈敬老會〉では何でもやったこと、やつらのために洗濯をし、小さな日章旗を縫ったこと、鞭で打たれたこと。〈ここまで話す度に、彼女はきまって袖をきつく引っ張ってうなじの襟元を緩めた。そこにはひとすじの傷があった〉。〈日本鬼子〉が取り圍む中で、やつらに脅された中國人のじいさんと寝たこと、〈じいさんの涙が彼女の顔にこぼれ〉たこと、そして〈彼はぼそぼそと『おれを恨まんでくれ！』と言った〉こと〔同上〕。

その結果、老女は村人みなが認知する特別な語り手となる。人々を引き連れて村じゅうをまわり、災難のあった場所を指し示しながら厳しい聲で「忘れるはずあるまいね！（原文、你們會忘記麼！）」と人々に問い、通りに人が少ないと他人の家にまで入り込む。が、〈身振り手振りを交えながら話す、聞いている人はすっかり自分のすることも忘れてしまった。彼女の感情に感化され、つられて話し出すのだった。／村じゅうが彼女を知ることになった。とりわけ子供たちは、しょっちゅう彼女を呼びに來た〉〔117頁〕。

より効果的な「語り」は、近しい身内から多數への聞き手の擴大によってもたらされた。聞き手は今では彼女の言葉を遮ったりせず、むしろ魅了され、更に「語り」を求めようになる。前掲したふたつの「語り」の微妙な變化に注意したい。前節で孫娘の末路を語る老女の言葉は、加害者の殘虐行爲を克明に再現し、聞き手に同じ恐怖を追體驗させようとするものであった。いま彼女はより容易く〈同情と同感〉を得るため、自分の被害を演出し、聞き手の〈憎惡〉を引き出している。しかも、その結果得た〈慰め〉〈恐怖からの解放〉は、聞き手を前に語ること自體の目的化を促す。こうして、語り手と聞き手との相互依存關係が成立する。

2-3. 葛藤と沈黙

この關係は、「語り」をめぐる家庭内の葛藤を表面化する。嫁達は老女を〈狂人（原文、瘋子）〉呼ばわりし、やめさせるよう一家の長陳新漢に詰め寄る。しかし彼は、前日母親が村人に〈自分のこと〉を語る場面に出くわした時のこと

を思い出し、嫁達を宥める。この回想シーンは「語り」に生じた新たな可能性を重層的に描き出している。

母親の「語り」の前で、彼はただ〈氣が狂いそうになって（同、幾乎要瘋狂起來）息子としての血が騒ぐのを感じたが、〈何ごとかわめくべきか〉〈驅け寄って母を抱き締めるべきか〉それともそこから〈走り去るべきか〉、なす術を知らなかった。つまり、全く無力に〈口を嚙まされたように、その場に震えていた〉のだ。すると母親は彼に氣付き、話をやめ呆然と彼を見たので聴衆も振り向いた。「語り」を挟んで向き合う二人。

…だが誰も彼を笑う者はいなかった。彼はこれまでになかった心の痛みを感じた。彼は近付いて手を伸ばし、言った『おれがきっと仇を討ってやる！』。ばあさまは満面に喜びを表し、やはり自分の手を伸ばした。しかしふとそれを引っ込めた。打ち萎れた鶏のように體を縮込ませ、すすり泣きながら人群れを押し分け走り去った〔118頁〕。

息子の復讐を誓う言葉は、二人の間に一瞬、感情の融和を芽生えさせる。だが直後、老女が〈手を引っ込め〉て〈體を縮込ませ〉、〈走り去〉てしまうのは、計らずも息子の前に「被害者としての自己」を晒したことが、彼の言葉にありありと實感されたためかも知れない。〈すすり泣き〉は彼女の苦痛と悲哀の表れとも、緊張がほぐれた安堵の結果とも讀める。そんな母に對し、誓いを口走った陳新漢がむしろ無力を感じるのは興味深い。彼が咄嗟に母でなく自分が〈笑われる〉のを懸念したことから穿った見方をすれば、〈仇を討つ〉という言葉は、「辱めを受けた被害者の息子」として聴衆の前に立たされた彼自身を救い出したい焦燥によるものとも讀める。ただいずれにせよ、聴衆が重い足取りで立ち去ったのち、一人残された彼は〈心の中にぽっかり穴が空いたようにも、何かに塞がれているようにも〉感じるのである〔同上〕。

回想の後、彼は苛立って聲を荒げる嫁に言う——『おれに何を言えと言うんだ、かあちゃんが苦しいのは分かってる』。母の「語り」の前では、ただ沈黙するほかない。「語り」は家庭内の葛藤をも壓倒したのだ。

3. 「語り」の完成

3-1. 二つの「語り」の結合

三番目の息子陳立漢の登場は更に「語り」を決定的に變容させる。まず老女は、語り手の座を〈遊撃隊〉から歸った息子に譲り、〈何人の日本人を殺したか〉話せとせがむ。そこで三男は母の望むまま、從軍の經過を語り聞かせる。——西柳村で二十數人の〈鬼子〉を殺したこと、その後〈東柳村〉〈李村〉〈三羊村〉を攻め、今は退いて後方にいること、遊撃隊が殺した人數はまったく數え切れず、多くの戦利品を得たこと。加えて彼は遊撃隊に傳わる武勇傳や、冗談めかした失敗談も語った。——輕機關銃を綿入れに隠して一人で城内に忍びこみ、機に乗じて十數人の日本兵をこっぴみじんにやっつけた〈有名な英雄張大全〉のこと、捕まえたデブの日本兵が知らぬ間に逃げ出し、七八人もが追いかけたが捕まえられなかったこと [119頁]。

老女はこのもう一つの「語り」を自らの「語り」に取り込んでしまう。すなわち〈これらの話を腹におさめると、待ち切れずに相手を探してぶちまけた〉。しかも彼女は、息子達が皆それぞれ〈農民會〉〈遊撃隊〉に所屬したことによって〈いっそう氣ままになり（原文、更放肆起來）〉、より多くの聞き手を求め別の村〈王家村〉にまで出掛けて行く。そこで〈兄弟や嫁達〉に向けられた「語り」をテキストはこう描いている。

彼女はあの殘酷な事實を説き聞かせた。彼女は涙を見た、話を聞いた後胸中に起こる戦きを見た。しかし、彼女は續いてすぐにそれらの傷付いた魂を撫で擦った。彼女はさらにあの、人を興奮させ鼓舞激勵する話、つまり息子から聞いたそれをおおげさに述べた（原文、渲染）。そこで人々は笑った。彼女は即座にこの時、皆に隊伍に入るよう勧めた。他の人が少しでもためらうのを見ると、彼女はすぐに怒鳴りつけた。『この腰抜け、死ぬのが怖い！ いいさ！ 日本鬼子が来てあんたを酷い目にあわせるから。あたしゃこのぼろ綿みたいな人間がやられるのをさんざん見たよ』。／確かに多くの彼女の話を聞いた人が、直ぐに隊伍に入った [119 - 120頁]。

三男の「語り」と結び付いた老女の「語り」は、聞き手に〈入隊〉を勧めるという新たな目的を得、實際的效果を擧げる。決定的な變化は、語り手の〈慰め〉〈恐怖からの解放〉というかつて「語り」自體に内在した目的が消えたことだ。その意味で、特殊で獨占的であった老女の「語り」は、この後聞き手の〈入隊〉という目的を前に普遍性を得る。つまり、誰が語るかは問題でない、〈入隊〉のために語るこそ、自明な價值ある行動になる。王家村から戻った老女は更に別の村に出掛けて行くが、いつも付き添う金姑にこう問うようになる。『おまえはどうして話さないんだい？』。そして〈實のところ、金姑も彼女の支持者（原文、贊助者）であり、人とこっそり話すときも、いくらかばあちゃんの言葉を使った。彼女はモジモジしながらあれらの話を眞似た）〔120頁〕。

この「語り」の普遍化は、家族間に生じた〈新たな感情〉として描かれている。いまや彼女は〈息子たちの顔色を気にしなくな）り、共に〈日本鬼子のことを話している時、一層彼らを愛しいと感じ、彼らに對する生涯の養育の苦勞に大いに満足した）。一方、嫁達とは〈いつでもこの唯一の話の材料を持ち出した）。テキストの語り手はこの變化を〈接近と融和〉〈親密さと懇切さ〉と呼ぶ〔同上〕が、それは言い換えれば、最初の「語り」において老女と家族とを隔てた差異——日本軍に囚われた者と無事だった者——の消失を意味することに注意しておきたい。

3-2. 〈何を語るべきか？〉

「語り」の普遍化は、ますます聞き手を擴大させる。その契機は、老女が匿名の聴衆を前に語るラストシーンに描かれる。老女の行動は息子達が所屬する〈會〉の關心を引き、二人の若い女が入會を勧めに来る。金姑と共に入會した老女は、嫁達を初めそれまでの聞き手を會に引き入れて精神的に活動し、そのクライマックスとして〈三か月來の遊撃隊の勝利を祝賀する大會〉で演説する。

彼女はまず他の参加者の演説を聞き、自分の「語り」を自覺的に再編する。〈彼女は思った、實際無駄な話がひとつもない（原文、沒有一句廢話）、これらの話を聞いて誰が感動せず、國のこと（同、國家事情）に関わらずにいられようか）。翻って、聴衆の前に立った彼女は『私は何を話すべきだろう？（同、

我該說什麼呢？）』と自問し、自らをこう名指して語り始める。

『あたしや日本皇軍に踏み躪られたばあさまだ、さあ見てくれ……。』。彼女は袖を引っ張った、彼女は舞臺の下に傳わる憐れみの聲を聞いた。『怖いかね、こんなのは何でもないよ……。』。彼女は自分が辱めを受けた有様を残酷に描寫した。彼女は全く自分の體面を顧ず、自分の苦痛も顧ず、人々の苦痛すらも顧みなかった、彼女は人々の顔を見回した、すべて苦しげな顔だった！ [123頁]

老女は〈無駄〉のない完成された「語り」のために、匿名の聞き手の前でただの「被害者」となる。そこに向けられた〈憐れみ〉〈苦痛〉を迎えるように、彼女は聴衆に呼び掛ける。『あたしを憐れむんじゃないよ、あんた方自身を憐れんで、あんた方自身を守っておくれ。あんた方は今あたしを可哀そうに思うだろうが、あんた方がいま鬼子を禦がないと、ああ、天よ！あたしやあんた方があたしと同じ目に會うのを見たくないよ！……あたしやすっかり年をとった、ちょっと位酷い目にあつたって何でもない、死んだって構やしない。でも、あんた方は皆若いじゃないか！あんた方は生きていかなきゃならないよ！（後略）』 [同上]。沸き起る〈千もの聲〉の呼應を聞き、彼女は突如〈この人達の生命と幸福のために自分を犠牲にしたい〉と思う。そして一層聲を張り上げ、聴衆の熱狂を煽る。『あたしやあんた方が自分の息子と同じ様に愛しいよ、あんた方のために喜んで死ぬよ…』 [同上]。

ここに描かれているのは、聴衆を熱狂させ、その一體感に飲み込まれた語り手の姿である。或いは、老女は先に述べた「他の参加者の演説」に、會場を盛り上げる話術を多少とも學んだのかも知れない。それが〈鬼子を追っ払う〉抗戦を呼び掛けるためだとしても、彼女の「語り」が聞き手のあり方によって變化することに變わりはない。

4. おわりに——こわれゆくもの

こうした一體感は長くは續かない。なぜならそれは、一人の語り手と大勢の聴衆による集會という非日常的な場だからだ。テキストの結末、老女の激情は

ゆっくりと〈疲れ〉、〈喉がかれて聲が出てこなくな〉る。が、聴衆の拍手は鳴りやまず、なおも〈彼女の話を書きたがった〉。ここに起こる逆轉。テキストの語り手は〈海の潮〉に譬えながら、聴衆が巨大な力に溶け合い語り手を壓倒するさまを描く。彼らはもはや残酷な「語り」に脅かされ、苦痛に顔を歪めはしない。〈人の頭の海が聲の大波に従って揺れ動いている、まるで大海原の巨大な波濤のように。しまい、ばあさんはありったけの力を振り絞ってなお六つの文字を叫んだ。／『われらは最後までやりぬくぞ！（原文、我門要幹到底！）』／そこでさらに大きな聲が、嵐のなか潮が岸に打ち寄せるように彼女に應えた。／彼女は支えの人の肩に倒れながら、舞臺の下の熱っぽい騒ぎをじっと見詰めていた。彼女は心から何が偉大であるかを感じ取った）〔124頁〕。

〈偉大〉な聴衆が老女を壓倒するラスト・シーンは、〈鬼子を追っ払う〉抗戦を呼び掛ける「語り」のひとつの完成であり、彼女が受けた殘虐行為に對して「あるべき」決起の姿とも言えるだろう。それは老女にとって「救い」かも知れない。だが、それだけではないように思える。

初め老女は、自らの恐怖や怒りを聞き手に追體驗させるため語った。それは誰にも共有しえぬ残酷な記憶の吐露であった。だが彼女は、より効果的な「語り」を學び、聞き手との依存関係をつくり上げた。彼女が語れば語るほど聞き手は擴大し、「語り」の普遍化を促した。最後に彼女は匿名の聞き手を前提する公的な「語り」を完成させ、聴衆の熱狂を引き出したが、返ってそれに壓倒された。テキストは、最後に、彼女にもたらされたものについてこう述べる。

〈彼女はゆっくりと視線を人の頭上から上方へ移した、果てしなく広がる空間に、ぬけるような青空に。彼女は崩壊を見た、光明を見た。涙はすでに彼女の視線をぼかしていたが、それでもこの光明は、確かに彼女の信念のなかにしっかりと打ち立てられた）〔同上〕。

光におおわれた〈新しい信念〉とは、恐らく「誰かのために語る」ことだ。〈抗戦〉のためであれ、〈みんな〉のためであれ。ならばそこに伴う〈崩壊〉とは、聞き手と老女とを隔てた差異の消失である。唯一の生存者の誰にも共有しえない記憶は、完成された公的な「語り」において〈無駄〉として消去され

た。それが彼女にとって「救い」であったとしても、それを生み出す非日常的な「語り」の場はいつか終わる。その時、老女の「語り」はどう変わるのか、テキストには書かれていない。聞き手の前に消された記憶は本當に消えてしまったのか。

注

- (1) 先行研究の多くは《涙眼模糊中の信念》としているが、後述のリプリント版に従う。
- (2) 年代順に代表的なものを挙げる。尾坂徳司『續・中國新文學運動史——抗日戰爭下の中國文學』250 - 263 頁（1965 年、法政大學出版局）、檜山久雄「延安時代の丁玲とその文學」（『近代中國の思想と文學』1967 年、大安）、江上幸子「落伍の烙印からの再生を求めて——『涙眼模糊中の信念』と『我在霞村的時候』をめぐって——」（『お茶の水女子大學中國文學會報』第七號、1988 年、同大中國文學會）、袁良駿『丁玲研究五十年』58 頁（1990 年、天津教育出版社）など。
- (3) 逆にリプリントは判讀不能な部分が多く、しかも恐らく後の版を参照して薄い所を手書した形跡がある。
- (4) 例えば老女が自らの〈恥辱〉を語る場面では、原版の以下の部分が削られている。〈有一個中國老頭子也睡了她，他是被逼迫的，那些日本鬼子站在週圍看他們，那老頭子的眼淚滴在她臉上，他咕咕的說：『你別恨我吧！』〉。小稿 2 - 2 を参照。
- (5) 底本は〈煊染〉となっているが誤植だろう。前掲《我在霞村的時候》（140 頁）及び《丁玲文集》（171 頁）に従う。
- (6) リプリント 7（197）頁、〈沒有一句費話〉。
- (7) この作品は、抗戰期の丁玲の代表作《我在霞村的時候》（1941 年）とのテーマの類似により、その習作的意義を持つものと位置付けられている（前掲先行研究を参照）。執筆順から見ればそうしたらえかたはありうべきだが、語り手／聞き手の構成からするとむしろ両者は相補的にも見える。紙幅が盡きたので稿を改め論じることにはしたい。